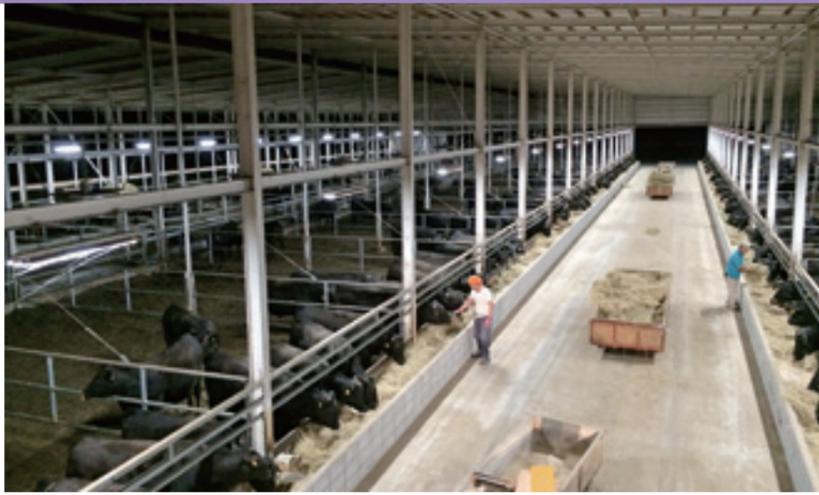


広々とした牛舎はストレスのない環境を実現 立ち姿の美しい、高品質の近江牛を育てる。



<http://marukamekoushustockfarm.web.fc2.com/>

株式会社まる亀こうし牧場



天井の高さ8メートル、牛が暮らしやすい空間を十分に確保した広々とした開放的な牛舎

**目指すは引き締まった筋肉の
 がっしりとした骨格の「かっさい牛」**

「農業と畜産の王国」として知られる近江八幡市の大中地区。「どこよりもかっさい牛を育てたい」と若き畜産家株式会社まる亀こうし牧場を経営する亀井頌司社長は熱を込めて語る。

50年ほど前、この地に希望を求めて入植した祖父の利男氏が始めた畜産業。父親の利次氏は亀井牧場の看板を掲げて、今では850頭もの黒毛和牛を肥育する、畜産が盛んな大中地区でも「最大規模の牧場」に育てた。その敷地内に自身の名を冠したまる亀こうし牧場が牛舎を並べている。

「近江牛の命はサシ(霜降り)の入り加減とされる。丸々と太った牛を目指す畜産家もいるが、枝肉にすると脂身が多すぎて歩留まりが良くない。この牧場

が育てたいのは、がっしりとした骨格をもった堂々とした牛だ。どこを切っても余分な脂身がなく、筋肉が引き締まっている。これこそ私がイメージするかっさい牛。そんな牛は立ち姿が美しい。亀井社長は熊本や宮崎、島根の競り市に出向いて9〜10カ月の子牛をえりすぐつて買い付け、20カ月かけて愛情と丹精をたっぷり注ぎ込み「極上の近江牛」に育て上げる。

ストレスのない快適環境の中

特製の餌が牛の体格を育てる

情熱がみなぎる亀井社長だが、若い頃は、父親が育てた亀井牧場を継ぐことになんとなく反発し、大学に進学する。プロの格闘家としてリングで戦った時期もあった。しかし、東京での生活に馴染めず、目的を見失っていった。そんな時、地に足をつけ、わらにまみれて牛を育てる



筋肉が引き締まり、立ち姿の美しい近江牛



近江八幡市桜宮町にオープンした焼肉店「カメチク」

とが、亀井社長とこうし牧場の強みかもしれない。

亀井牧場では、給餌作業を一部機械化して作業を効率化した。短縮できた時間は牛とのスキンシップにあて、牛や牛舎をチェックする。通路や餌箱の掃除や牛床替え、わら敷きなど手の抜けない作業に早朝から夜まで牛舎を駆けまわる。「それでも、牛の目を見れば癒やされる。温かな心になれる。畜産家にとって最も重要なのは牛をどれだけ愛せるか。結局、最後はそれしかない」。亀井社長が世話をする牛の総数は亀井牧場とこうし牧場合わせて千頭を超える。牛と毎日向き合い続ける地道な努力が近江牛のブランドを支えているのだ。こうし牧場の牛は出荷時の体重が平均491kgと立派な体。雌牛の平均とされる450kgを大きく上回る。品質もA4等級以上の上物が80%以上を占めるといふ。

クラウドファンディングで子牛を仕入れる

消費者との接点を求め焼き肉店をオープン

肥育頭数を増やすには資金調達が必要だが、亀井社長はクラウドファンディングに着目した。子牛の仕入れ資金に充てることで事業の拡大を図る。「クラウドファンディングで畜産業を初めて扱ってもらったので注目されたのか、出資が順調に集まりました。近江牛のブランド力に加えて、牛に情熱を注ぐ若者の姿が好感されたと信じています」。

持ち前のチャレンジ魂ゆえか、亀井社長はこの6月に飲食業にも進出し、近江八幡市桜宮町に焼き肉店「カメチク」をオープンした。低価格で近江牛と新鮮なホルモンの味を楽しめる庶民派の店だ。設備資金には、創業や第二創業を支援する「しがぎん」ニュービジネスサポート資金を利用した。「育てた牛がお客さまにどう評価していただけなのか。それを見届けたくて始めた」。消費者との接点を求める亀井社長は、牧場経営者としての新たな視点を探る。

亀井社長が「立ち姿の美しい牛」にこだわるのは、亀井牧場の牧場長として岐阜の競り市に牛を運んでいた経験からだ。成牛を見るだけで良質な肉質かどうかを見分ける枝肉業者たちと出会い、「立ち姿の美しい牛が本当に良質な肉牛」であることを学んだ。だから、どんな牛を育てるのかを迷わず追求できるこ

大きく育った牛の8割が A4等級以上の一級品

Profile

株式会社まる亀こうし牧場

- 本社/近江八幡市中町69
- 設立/2013年
- 資本金/200万円
- 従業員数/4名
- 事業内容/近江牛の肥育



代表取締役
 亀井 頌司氏

Voice

先人が努力を重ねて築いた「近江牛ブランド」を受け継ぎ未来へつなぐため、個人事業の枠を超え事業を成長させようと法人を設立しました。今後も「迫力のある、美しい立ち姿の近江牛」の肥育に情熱をもって全力で取り組んでいきます。